
その一球に全てを託して！

猫神シュー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その一球に全てを託して！

【Nコード】

N7511B

【作者名】

猫神シュー

【あらすじ】

中学校時代の悔いを胸に甲子園優勝を目指す。そんなことは無謀だと馬鹿にされてもめげずにの赤木とのバッテリーで一步一步、歩んで行く

初球（前書き）

かなり短いです

次からは長くしていきたいと思っています
是非アドバイスをお願いします

初球

広香中VS橘中

猛暑の中、汗が顔を浸り落ちる

カキーン

「あ！」

打ったボールは、センター前に落ちる

「くそ、あと一人なのに」

三対二、九回裏、ツーアウト、同点のランナーが出た場面でバッター四番。

ラスト一人

一塁ランナーがギリギリとリードを少しずつ大きくとってくる警戒しながらも第一球。

『ボール』

ストレートは外角低めに決まったように見えたがわずかに外れた第二、三球は変化球を巧みに使いストライクをとり勝負球になる第四球

「あっ！！」

カキーンッ！

すっぱぬけてしまった白球は真ん中に。

無情にもバックスクリーンへの2ランホームラン

俺は呆然としていた

（逆転ホームラン…、敗けた…のか）

バックスクリーンを見てしまう

点数、ラスト一人、サヨナラホームラン。

チームの勝利の為に仲間が必死になって入れてくれた点数。自分が守るべき点数だったのに打たれてしまった。考えていると大粒の涙が頬を伝って落ちる

マウンドにしゃがみこむとより一層溢れだしてくる

中学校最後の大会は幕を終えた

秋、そろそろ進路の事を考えなければいけない時期なので今パンフレットを見ている

「どこにするべきかな？」

俺の住んでいる所は都内にも多くの学校があるが、学力の方は下の中、結構『勉強』は苦手だ

俺は行ける学校が少ない中自分の野球が活かせる学校が何処なのか決めかねていた

野球部の顧問が

「お前は野球に対する熱意がある。
仲間を思いやる心があるからそれを活かせる悔いのない学校を選べ
よ」

それを聞いて俺は、都内からは少し離れてはいるがスポーツが盛んな
仁田^{にった}高校にする事にした

その後、見事に受験は合格。

そして新たな高校生活が幕を開けた

第二球（前書き）

出来たら感想、アドバイスをお願いします

第二球

「へえゝ意外にもしつかりしてんじゃん」

俺は仁田高校の球場を初めて見た

校門を通つてすぐ隣にあるそれは充実しているとは思えないが野球器具が設備されていた。

浸っていると誰かが走ってくるのに気付かず

「いてっ！！」

「あっ！わりいな。」

急いでるんだ。その様子じゃお前も一年だろ！？

なら、急いだ方がいいぜ！いきなりの遅刻って好印象じゃないからな」

（大きなお世話だ！）

と、思いつつも少し急ぐ

教室に入るともう朝のHRが始まっていた。

すると皆が一斉にこつちを向いてきたのでなにくわぬ表情で席に着く周りを見渡すと前の席にはあの俺にぶつかってきたヤツがいた。

HRが終わるとすぐにぶつかってきたヤツがこつちを向いてニヤツとし、

「やつぱり遅れたんだ。だから言っただろ！？」

「確にな。ってかお前誰だよ？」

「俺か？俺は赤木拓也。で、お前は？」

「俺は桜井翔。中学の時野球部でピッチャーだ。」

「なら、俺も野球部でキャッチャーしてるんだぜ！おれたち最高のバッテリー組めるんじゃないか！」

「俺は嫌だね！実力が未知数のヤツと組めるかよ。・・・まあ捕れたら別だがな」

「捕ってやる。翔、お前の球を必ずな！そして組んでみせる」フウンツと鼻息をあげ自信にみちあふれていた

（言うのだけは誰にでも出来る）
そう思っていた

部活が始まるまでは…

着こなせていない制服からユニフォームに着替えた

「まだ、先輩来ないから翔、キャッチボールやろうぜ」

「ああ、いいぜ」

意外にも赤木の腕が太く、筋肉が一つ一つ形が判るくらいよく鍛えられている

（キャッチャーって言うのはだてじゃないんだな……）

そう思っているともう周りには他の部員がいた
その中にはきつと上級生だろうと思われる体格がしっかりした人達

がいた。

もうすぐ練習だろうと思いキャッチボールを切り上げる
赤木の方は少し残念そうだった

なにやら上級生の一人が皆の前に立って

「えー、集合！」

「ういー」

「えー、今日はサハラ砂漠（先生）が少し遅れるのでとりあえずキャッチボールとアップをする」

みんな散らばってキャッチボールをしているので俺達も渋々する事にした。俺は嫌だったが赤木は嬉しそうだった

「なあ翔、サハラ砂漠って何の事が分かるか？」

「さあな。別に誰でもいいよ
全く無いと言えば嘘になるが、まあ少しは気になるけどな……」

そんな話を長々と続けていたらアップも早く終わった。

「おーい！サハラ先生が来たぞ」

「なに！もうもう来たのか？早かったな
全員練習やめ！それぞれの学年横一列に並べ」

二、三年は早く動くものの一年は何の事なのかわからずゆっくりしているサハラ先生がやってきた

桜井達は遠目にいたため集まるのに遅れ、それに気付いたサハラ先生が強い眼力で睨みつけてきた。
ヤバイと思ったが平然と列に並ぶ

その時、気付いた

サハラ砂漠は地球温暖化によって今も緑がなくなっている。土と砂しかない地平線が続く。

つまり、その頭はハゲている。

しかも前の方から。激しく。まぶしい

温暖化は関係無いと思うが、なるほど…サハラ砂漠の事がやっと分かった

考えた途端

(プッ!!)

思わず口に出そうになるが抑える

きっと気付いているだろう、拓也は口に出さなくても表情でわかる満面の笑みで肩を揺らしながら堪えている。

「今日は、まずランニング、二、三年はノック、一年は球拾いをする。」

ただし、投球練習は一年もする。以上だ!」

みんな散らばって行くので俺達も行こうとするて

「おい待て、その一年!まだ慣れていないのは分かるがもっと素早く行動しろ!周りの迷惑になる」

俺は早く終わってほしかった

『投げたい』という意識だけが強なる

そんな事を知ってか知らずかサハラ先生は話はすぐに終わったが瞳の奥では怒っているようだった

第三球

「いくぞ俺の直球」

「こいつ！」

シュツツ

ズバアアアアーン！！！！

「くつつ！いい球だぜ」

「よし、次はカーブだ！」

ズバアアーン！

俺の投げたボールは綺麗に曲がり拓也のミットに収まった

「次は直球だー！！」
ドンツ

投げ放たれた球は地面にぶつかり

「くそつ、させるか」

拓也は前かがみになり必至でボールを抑えてようとするが嘲笑うかのようにバウンドが変わり後ろにそらしてしまった

「まったくどこに投げてるんだよ」

「わりいー、ボールの縫い目に引っ掛かっちゃって……」

まだ、ボールは止まることなくコロコロと転がるボールを追いつけると誰かの足に当たって止まった

「……？」

ボールに気付き手に捕る

「スイマセーン、こっちに投げて下さいっ」

「いや、直接来るよ」

（いや別に来なくていいよ）

そう思いながらもボールを受け取る。

誰だっけ？この人？……あっ！いやっ違う……ん……あっ！！思い出した。

進藤先輩だ！

進藤先輩は二年で二番セカンドをしている。とても優しく頼りになる。

「ハイ」

ボールを差し出す

「ど、どうも」

「それにしてもいい才能を持っているな。将来が楽しみだよ」

拓也はとても嬉しかったのか、

「あつ、ありがとうございますっ!!」

「!?!? キミは何を言ってるんだい? 僕はあのピッチャーの事を言ってるんだがな...」

「エッ!?.....そうなんですか.....」

ガビイイーン

まさにそんな効果音がピツタリの場合だった

一方、俺はと言うと拓也がボール拾いに行ってしまったので退屈だった

ボーッと空を見上げ飛び交う鳥を見たり、風が肌に当たり気持ち良かった、と思ったのもつかの間少しずつ体が冷めて寒く感じる時があった

「まだなのかよ...」

すると、向こうの方から二人の姿が見えた。逆光で顔まではわからないが確実にこっちに近づいてくる

(あれ.....誰だ?)

きつと一人は拓也だろうと思いたい。いや、きつとそうだろう! そうなるともう一人はなんだ?

「なー拓也だろ!?

もう一人は誰なんだ?」

「そう、俺は拓也だ
こっちが進藤先輩だ！お前ちゃんと敬語を使え！！」

そんな事は聞きながした。進藤先輩がゆっくり歩んでくる
するとやつと顔が見えた。髪はやっぱり短髪で顔は整っていてとて
も優しそうなイメージだ

「いや、別にいいよ」と、拓也をなだめる

「ほら先輩も言ってるんだし……」

「だからって目上の人には、けいこ……」

拓也の言葉を進藤先輩が遮る

「いやゝね、さっきから見てたら結構出来そうだからね、そこでだ、
俺と勝負してみないか？勝負は一打席。打とればキミの勝ち、ヒッ
トを打てば俺の勝ち。どうだい？やってみないか？」

すると翔の心に火をつけた。

「ウオオー！！ やってやるぜ！お前なんか三球で終りだ！！
首を洗って待つとけ！」

「そんな事しなくてもすくにやるよ
じゃあー行こうか」

先輩が行く先を見るとそこはグラウンドだ
まだ、練習があるんじゃないかといいかけると 丁度一通り練習が終
わって休憩している所だった

先輩はと言うとサハラ先生と何やら話して先生も納得したようだった

「おーい、翔！拓也！こっちにこい！」

そう言われて走って向かう

「おまえら二人でバッテリーを組んで俺と勝負だ！審判はサハラ先生がやってくれる」

「よっしゃ！はじめてのバッテリーだ！

必ず打ち取るぞ！」

「おい、拓也寝惚けてるのか？打ち取る！？なに言ってるんだ！三振捕るに決まってるじゃないか。お前は打ち取りたいのか？」

「そうだったな

わかった。二人で進藤先輩を三振にとろう」

そして闘いは始まった

「プレイベールっ！！」

サハラ先生の一声で始まった

ってか結構眩しいから。なにがって？ それはモチロンあ・た・

ま！

反射してるし、ピンポイントで目に当たってるし！

「眩しい……………」

（あっ！言っちゃった。そりゃあ誰だってそう思うよ）

そんな事を考えないよう顔を振る

投球だけに集中する

「翔！何も考えず俺のミットめがけて投げてこい！」

（言ってくれるぜ。言われなくても投げてやるぜ！）

拓也がミットを構え、続いて進藤先輩が構える

セットポジションから第一球。

シュツッ！！

ズバァーアーン

「ス、ストライク！」

進藤先輩はボールを見送った

「ふーん、なるほど。確かにいい球だ」

続いて第二球。

シュツッ！！

カキイーンッ

ガサッ

打った球は後ろにいきフェンスに当たった

「よし、当たった！」

続いて第三球。

シュツッ！！

カキイーン

「あっ！」

白球は弾道を描きファール、フェアのギリギリを飛ぶ

「入るなっっ」

すると曲がってファールになった

「チッ！」

（タイミングは合ってきた。だが、まだ遅いか…）

（あ……あぶねー）

「翔の球は走ってる！次は最高の球を投げてこいっ」

続いて第四球。

シュツツ

カキイーン！！！！

見事にホームラン

おれ結構ガツクリだし

「いやゝいい球だったよ。つい、燃え——」

「ほんとと良かった！ホームランだったとはいえ、よく伸びていた。君が良ければ週末の練習試合出てみないか？」

あっ！遮った。

ま、どうでもいいか

「どうでもいいか。は無いだろ！バッテリー組んでたのに」

心の中読まれたっ！

こんな体験初めてだ

「モチロンいいですよ！初めての試合で見事に完封してみせますよ」

「えっ！先輩良いんですか？いきなり一年を！？」

「いいんだ。コイツは！なんか将来期待できるからな…」

「ハアアー」

なんか納得いかないようだった

「それじゃ週末に出すから体調整えとけよ」
そして週末。

試合は始まった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7511b/>

その一球に全てを託して！

2010年10月12日08時31分発行